

「日本・マレーシアビデオ交流展」報告

総評

今回の「日本・マレーシアビデオ交流展」の最大の成果は、日本側スタッフが多くの経験を蓄積できることであった。実質のコアメンバー4人がSVP2を事業主体として計画を作成した。役割分担はおおよそ以下の通りであった。

佐藤博昭：代表、事業企画、助成金処理、会場手配、協力関係の取り付け、レクチャー交渉

服部かつゆき：プログラムディレクション、助成金処理、翻訳、海外アーティストの交渉

田中廣太郎：上映作品整理、字幕翻訳作成、上映、ライブ企画

柳田晶子：プログラムデザイン

SVP2のメンバーである在ドイツの中沢あきは字幕翻訳で参加した。

事業規模の全体を振り返れば、よくぞこの人数でこなしたと思うほど、ハードワークであった。また、予算も規模に比すれば明らかに少額であったが、旅費の部分負担や予算内で手配した宿泊施設など、十分なケアとは言えない状況でも、マレーシアからの参加作家の理解によって実現出来たと言つていい。また、上映会に足を運んでくれた多くの理解者、協力者に支えられての成功だった。

マレーシアから来日した作家達5名は、それぞれ本国でキャリアのあるアーティストであったが、イポーとクアラルンプールを拠点とするアーティスト達で、それに個別の活動フィールドを持っていた。カマルとヌルハニム、シャロンとシュウワイは、これまでにも作品を共同制作するなどの関係は持っていたが、K.Lを拠点とするマヌールも加わり、今回の事業による来日で、より深い交流の機会を得たという。みな事業に協力的で、明るく、滞在期間を楽しんでいたように思われる。

2009年12月の現在、彼らは「マレーシア・日本ビデオ交流展」のマレーシア開催に向けて、ミーティングを開始した。

事業の詳細は、以下に報告日誌を示す。

事業実施データ

「日本・マレーシアビデオ交流展」の全日程は以下の通りであった。

板橋区熱帯環境植物館 開館15周年イベント「マレーシア展」への協力

9月12日（土）11:00～17:00 カード作りワークショップ（参加者40名）

9月13日（日）11:00～17:00 アニメーションワークショップ（参加者45名）

9月20日（日）12:00～17:00 マレーシア映像作品上映（参加者20名）

9月26日（土）12:00～17:00 マレーシア映像作品上映（参加者10名）

10月3日（土）12:00～17:00 マレーシア映像作品上映（参加者40名）

10月4日（日）12:00～17:00 マレーシア映像作品上映（参加者12名）

10月11日（日）12:00～17:00 マレーシア映像作品上映（参加者30名）

長野県高等学校放送講習会ワークショップ

9月26日（土）27日（日）9:00～18:00（参加者高校生30名 教員6名）

六本木ストライプスペース

10月2日（金）16：30～21：00 映像作品上映およびパフォーマンス （参加者35名）

10月3日（土）13：00～19：00 映像作品上映およびレクチャー（参加者42名）

日本工学院専門学校・こらぼ大森

9月28日（月）～10月1日（木） 10：00～17：00 学生との映像制作ワークショップ
(参加者延べ20名)

日本大学芸術学部

10月2日（金）16：30～18：00 映画学科映像コース希望者20名

福岡アジア美術館あじびホール

10月8日（木）～10日（土） 15：00～19：00 作品上映および作家によるティーチ・イン（参加者延べ55名）

九州産業大学芸術学部

10月7日（水） 16：30～18：00 作品上映とレクチャー（受講学生30名）

主な協力者は以下の通りであった。

モハメット・ナジブ・ラザク（マレーシア側ディレクション、マレーシア作家調整）

シャロン・チン（来日アーティスト）

カマル・サブラン（来日アーティスト）

コク・シュウワイ（来日アーティスト）

マヌール・ラムリー・マフード（来日アーティスト）

ヌルハニム・カイルデン（来日アーティスト）

ハヌール・J・サイドン（作品上映協力）

ノビスタ（Novista）（マレーシア映像プロダクション、上映作品提供）

東英児（日本工学院専門学校放送・映画科、ワークショップ手配・運営）

奥野邦利（日本大学芸術学部映画学科、レクチャー手配、日本側参加作家）

福島公男（板橋区立熱帯環境植物館・館長、事業協力、上映会場提供）

福田忠昭（NPO都市・デザインプロジェクト、福岡展助成処理）

黒岩俊哉（九州産業大学、レクチャーハンドル、福岡展協力）

井上貢一（九州産業大学、福岡宿泊施設手配、福岡展協力）

黒田雷児（福岡アジア美術館、福岡展上映会場提供）

ウォン・ホイチョン（アジア美術トリエンナーレ参加作家、福岡展レクチャー、作品上映）

大江直哉（NPO法人ビデオアートセンター東京、日本側参加作家）

川部良太（東京芸術大学大学院、日本側参加作家）

杉田このみ（一橋大学、日本側参加作家）

西山修平（日本側参加作家）

韓成南（キュ레이ター、日本側参加作家）
波多野哲朗（日本映像学会、プログラムアドバイス）
相内啓司（京都精華大学、運営アドバイス）

東京展

学生参加者 45 名（ワークショップ・レクチャー参加、上映補助、日本大学、日本工学院専門学校）

一般参加者延べ 197 名 板橋熱帯環境植物館ワークショップおよび上映

上映会参加者 77 名 六本木ストライプスペース上映およびレクチャー

福岡展

学生参加者 30 名（九州産業大学レクチャー）

一般参加者延べ 55 名（福岡アジア美術館・あじびホール上映）

本事業は以下の助成団体、施設の協力を得た。

国際交流基金（渡航費、滞在費）

板橋区文化・国際交流財団（東京展会場費、レクチャー、上映、翻訳謝礼等）

板橋区立熱帯環境植物館（事業協力、上映会場提供）

福岡市文化芸術振興財団（福岡展、滞在費等）

「日本・マレーシアビデオ交流展」報告日誌

9月12日（土）

板橋区立熱帯環境植物館ワークショップ初日。通称・板熱。マレーシア作家はまだ来日していないが、今回の事業のスタートラインであった。この植物館は今年が開館15周年で、独自のイベントとして「マレーシア展」を企画していた。それは奇跡的な偶然だった。上映会場の候補と事業協力をしてくれる場所がないかと探していた時、偶然HPでその存在を知った。

「マレーシア展」ではマレーシアの舞踊団のイベントやマレーシア料理の講習会などが計画されていた。板熱はマレーシアのペナンにある植物園と提携関係にあった。早速、ビデオ上映の企画と関連ワークショップの提案を持って植物館を訪ねた。偶然といえば、この館は、今回の協力者でもあるアーティスト瀧健太郎の父親が設計していた。熱帯植物を配置し自然環境に近づけたドームは、独得の設計技術が必要らしい。



この日のワークショップは「マレーシア風カード作り」だった。事前に用意した植物をデザインした数種類の素材を組み合わせ、マレーシア風にトロピカルな雰囲気のカードを作ろうという企画だった。どのくらいの参加者があるか不安であったが、2時間3回のワークショップは平均15名程度の参加があり、親子や小学生グループの参加があった。



9月13日（日）

板熱ワークショップ2日目。この日は「驚き盤でアニメを作ろう」と題した。企画当初は熱帯植物の単純なメタモルフォーゼをパターンとして用意し、塗り絵ふうに仕上げるというアイデアだったが、参加者に絵心のある人がいると、退屈かもしれないと考え、もう少し高度なパターンや、自由に書き込める用紙も用意した。この日も2回のワークショップはそれぞれ参加者が20名を超え、用意していた50枚の台紙は不足してしまった。



9月20日（日）

板熱作品上映初日。今回のプロジェクトで初めての作品上映だった。字幕担当の田中廣太郎から上映作品を受け取ったのは、前日の夜、JR 水道橋の駅だった。板熱での上映作品は、客層が親子連れや小学生、隣接する福祉施設の関係で高齢者が多いことを考慮して、自然環境を扱ったドキュメンタリー4作品を加えていた。ナジブ・ラザクの知人でもあるという Novista という、マレーシアのドキュメンタリー映像プロダクションが作品を提供してくれていた。しかし、このドキュメンタリー4作品はいずれも膨大な翻訳作業を要した。つまり、ナレーションが多かった。翻訳作業は手分けして行われ、地名や山、川の名前などは、詳しい人の協力で読み方などを突きとめた。こうした膨大な作業もあり、上映作品の字幕付き DVD 化はかなりの時間を要した。そのため、前日に水道橋での受け渡しとなった。二人が少し安心して居酒屋に入ったのは言うまでもない。

上映は数名の観客からスタートしたが、最終的には約 20 名になった。この日が実質の上映チェックだったため、ひと通りの字幕を読んでみたが、やはり文字が多い。4 本観ると情報量が相当にあることが判った。しかし、これらを再度確認し文字数を詰める余裕はなかった。板熱ではこの 4 作品と、『人魚島の子ども』『雨の日々』『忘却』のドキュメンタリー3作品、映像表現を扱った 7 作品を上映した。『人魚島の子ども』『雨の日々』『忘却』はそれぞれ、マレー系の舟大工、インド系のゴム園労働者、華僑系の歴史を扱っており、面白い組み合わせのプログラムになったと思っている。このプログラムは、上映後に幾つか歴史背景についての質問があった。

予想されたことであるが、今回来日する作家の作品を含めた「アーティスティック」なプログラムは、観客にとっては少し厳しかったようだ。

9月25日（金）

この日は来日作家のひとりシャロン・チンが、他の 4 人よりも先行して東京に来た。翌日から二日間、長野県上田市で行われる「ワンミニッツ・ワークショップ」に参加するためだった。

長野県の高校教諭・林直哉先生は、現在筑摩高校で放送部を指導しているが、佐藤が審査委員を務める「東京ビデオフェスティバル」での大賞受賞経験のある、有名な指導者である。林先生がこの時期に「ワンミニッツ・ワークショップ」開催したいという打診を受け、制作指導を行うことになった。企画のやり取りの段階で「われわれの企画でマレーシアの作家が来日しますが、一緒に参加してもらってはどうでしょう」と提案し、シャロンが先行来日し、服部も同

行することになった。

服部がシャロンを出迎えて、夕方板橋駅の傍にあるホテルで落ち合うことにした。ホテルを板橋にしたのは、翌日大宮経由で上田に向かうためだった。シャロンは今年 7 月には、札幌に滞在しワークショップを行っていた。その時の帰国途中に東京で会って、「ワンミニッツ」の話をすることが出来たので、何となくイメージは出来ていたのだと思う。シャロンと再会し、この日はホテル内のレストランで豆腐料理を食べた。シャロンはベジタリアンで、肉類は食べない。服部が出迎えた後、札幌で目覚めたという缶酎ハイを既に飲んでいた。この人はよく酒を飲む。

9月26日（土）

この日は板熱上映の 2 日目。上映は田中廣太郎に任せて、佐藤と服部、シャロンの 3 人は早朝から上田に向かった。

上田高校は上田城の敷地内にある風情のある高校だった。藩校の跡地だったそうで、周囲は場内の公園という恵まれた立地にある。10 時に学校に到着すると、既に参加する高校生と各高校の先生が集合していた。生徒達は県内の高校の放送部の部員で、4 人ごとにテーブルについていた。2 日間で 2 回ワンミニッツの自己紹介（セルポートレイト）を制作するプログラムだった。午前中は「自分の樹を作る」ワークショップ。自分の人生を一本の木に見立て、樹の左側には「自分を取り巻く外部の事柄」（家族や学校のことなど）、右側には内部の信条など（海が好き、内気である、将来は何になりたい、など）を付していく。付箋に書いた言葉を樹の周辺に付けていく。自己分析も兼ねて、出来上がった樹の図を制作のヒントにするためだった。出来上がった「自分の樹」をグループで発表した。シャロンも自分の樹を作り、生徒の前で発表した。

昼食は上田高校の学食に準備してくれていたが、ベジタリアンのシャロンは食べられるものだけを上手により分けていた。

午後は早速 1 分間の映像作りに入った。午前中の発表を受けて、映像化出来そうな自分のトピックを探し、構成を考える。この段階でわれわれも相談を受けた。シャロンは自分でも 1 分間映像を作ることにして、その構成を考えていた。服部と佐藤でシャロンの撮影を手伝うこととした。生徒達は撮影した素材をパソコン室で編集して、今日中に発表することになっていた。この日は夕食も学食に準備してあったが、牛丼であった。シャロンは牛丼、牛抜きにするしかなかった。19：00 頃から生徒の作品発表があり、われわれは短いコメントを求められた。シャロンの 1 分間映像も出来上がり、発表した。

20 時過ぎに高校を出た。この日は上田駅前のホテルを用意してくれていた。われわれ 3 人は、ホテルまでの道のりで焼鳥屋に入り、ビールと焼酎を楽しんだ。

板熱の上映を担当していた田中から連絡が入り、観客は少なかったが無事終了したということだった。

9月27日（日）

ホテルの朝食会場に来たシャロンは、風邪を引いたらしく、涙目で鼻をすすっていた。この頃は全国的に新型インフルエンザが心配されていた時期で、シャロンが咳をしていると、高校の先生が怯えるのではないかと少し心配した。

9：00 に高校に到着。この日は 1 日掛けて再度 1 分間映像を制作した。構成を練り直し、早速各グループが撮影に入った。われわれ 3 人は構成の相談を受けたりしながら、撮影の様子を見て、アドバイスなどを行った。昼食後は少し自由時間をもらって、近辺を散歩した。上田城までは歩いて 15 分ほどで、いい気分転換になった。

夕方には再び生徒全員が作品発表を行い、シャロンと佐藤で短い講評を行った。2 日間という強硬なスケジュールであったが、高校生達は確実に自己表現の方法を掴んだように思う。どの生徒の作品も明らかに 2 日目の方が優れていた。

せっかく長野に来たのだから、駅前の居酒屋でそばを食べて帰った。シャロンはこの日に蒲田のホテルまで移動した。

9月 28日（月）

ヌルハニム、マヌール、カマル、シュウワイの 4 人が来日。早朝、成田に到着した。今日は日マ映像ワークショップ初日だった。

日マ映像ワークショップはマレーシア作家と日本の学生が共同で体験型学習をおこなう場だ。参加学生は日本工学院専門学校放送映画科と日本大学芸術学部映像科の学生 7 名と来日作家 5 名のあわせて 12 名。大田区大森町を拠点に 4 日間行動を共にする。目的は【みる】と【きく】ことに、より意識的になること。経験あるマレーシアの作家たちが毎日順繰りに講師となり学生の【みる】【きく】能力を深める制作体験を計画した。



初日の講師はシャロンだった。彼女のお題は「映像の香水づくり」。調香の理論を映像づくりに当てはめてみるというものだ。香りは、時とともに匂いが薄れやすい順にトップ、ミドル、ボトムというノートでわけることができる。この 3 つのノートを映像に置き換えて収集・調合し香水を作つてみようというのだ。トム・ティクヴァ監督映画「パフュームある人殺しの物語」の抜粋を観て調香の概念を把握。そのあと嗅覚から視覚のノートへの翻案を検討し、班分けをし分担、いざ大森町へ香料採集に出発した。

午後 2 時。ヌルハニム、マヌール、カマル、シュウワイの 4 名が会場の大森コラボに遅れて到着。4 人は長いフライトで疲れきっていたが、香料採集からもどってきた学生たちと邂逅。言葉の壁を越えて自己紹介し合う姿は微笑ましい。

その後、町工場の見学。自己紹介でひとまとまりになった参加者を 2 つの班に分けて至近の町工場を訪れた。見学を快く引き受けてくれた昭和製作所は金属の難加工専門の会社だ。ワークショップの合間に組込まれた見学会は、大森を町で働く人たちの側から覗くことが目的だ。取締役生産管理部長の舟久保利和さんが社内見学のガイドを務めてくれた。



工場見学を終えた後、今ワークショップの集会場となっている大森コラボレーションの一室に集まり一服。20畳はゆうにある風通しのよい和室は心地よく、寝転がり休憩する人もいた。そのままゆるやかに散策収集の成果発表へと移った。班ごとに収集した映像ノートの上映とその成果を発表した。収集の思惑や嗅覚のメタファーで町をとらえることについて各班の体験が共有議論された。

ワークショップ終了は、赤坂のウイークリーマンションにチェックイン、アーティスト5人とSVPスタッフでささやかな歓迎会をした。3月の調査渡航の際に思い描いた念願の光景だ。赤坂界隈の居酒屋に行き、魚や野菜などを中心に注文した。材料に豚が使われていないなど、食事には気を遣わなければならない。シャロンとシュウワイ以外の3人は酒を飲まないので、緑茶やコーラを飲んでいた。



9月29日（火）

ワークショップ2日目の講師はシュウワイだった。シャロンは体を崩し欠席。学生の参加者が野月直人ひとりだったのでSVPの佐藤、服部も加わり7人でハイレベルなワークショップになった。ひとつ目のお題は『動と静』。町にあふれる動きと静まりを映像でとらえるものだ。動と静は、シュウワイ自身の作品制作においてつねに意識している要素とのこと。ことば自体に解釈の幅があるので参加者それぞれの解釈の幅や、異なる視点が映し出されて面白い。シュウワイから「動くものを見ているからといって、それを見ている人の気分が動いているとは限らないわ。撮影対象の動静だけにとらわれないように・・・。」とみなに忠告していた。

人数が少ないと物事は早くすすむ。時間が余ったので、ふたつめのお題『かつて見たことの

ないもの』にも取り組んだ。

夜はファシリテーターの近藤とともに中間総括。映像と言語のズレを感じることが大切なこと。そういったズレや違和感を感じることがワークショップであること。ワークショップによる体験学習は頭で考えて硬直してしまった映像と言語意味のこんがらがりをほぐす効能があること。など振り返った。

9月30日（水）

ワークショップ3日目はあいにくの雨模様。参加者は10人超。講師はカマル。【トゥカール】がお題だ。この耳慣れないマレー語は変質という意味だそうだ。カマルは参加者への説明を何故かマレー語で話す。シャロンとシュウワイがそれを英語に通訳し、その英語を近藤と服部が日本語にして参加者に伝えるという形となった。何やら意図があるようだった。

「【トゥカール】は、①敏感になり ②十分意識をし ③再定義することを材料にした視覚調理である」と解説があった。加えてクロースアップ撮影、視覚的・触覚的な模様、色、構図、など意識すると良いだろうともアドバイスがあった。

各自のワークに先立ち見学会第2弾「大森 海苔のふるさと館」へと出かける。ここでは、昭和37年まで続けられた東京湾海苔漁業の歴史について知ることができる。大森コラボレーションの裏に流れる内川。この川を下り東京湾にでると、そこに博物館がある。博物館の好意



で展示物の解説をしてもらい、海苔作りを体験まですることができた。

博物館から大森コラボレーションまでの帰り道を【トゥカール】のためのワーク空間とした。3時半、集会場に参集し甘味と温かいお茶で雨中散策の疲れをいやす。野月が持参したガンダム模型にカマル、マヌール、東が呼応。ガンダム談義にしばし熱をあげる。

3日目ともなると皆発表に慣れてきて、映像の見せ方や発表も手際よい。

ワークショップ後はヌルハニム、シャロン、田中美保、佐藤、服部の5人で夕食を共にした。2日（金）におこなわれる日大レクチャーの通訳打合せだ。通訳の田中美保は日大の現役学生でもあり継続中のワークショップに興味をもったようだ。

10月1日（木）

ワークショップ最終日はサプライズではじまった。参加者の具島、大里、山田の美人トリオが手作弁当で皆をもてなしてくれたのだ。お弁当はど万国共通だが、おにぎりとそのおかずは日本独特だろう。マレーシア作家にとっては海苔と日本の食卓のつながりを体感する良い機会となった。勿論ハラルと菜食の作家がいることにも配慮されている献立。もてなす心遣いが美

しかったうえに、味も格別だった。

最終日は少し趣向を凝らしてお題を決めた。参加者がそれぞれお題を案出するのだ。そのお題を紙にしたため籤を作り、ひとりづつお題をひく。大森を散策する上でのお題を籤にゆだねるのだ。「笑顔 Elements of Smile (笑顔の要素)」や「Letter between two people, Use video or still images (ふたりの間の手紙ビデオと静止画を使って)」のような籤たち。あたるもあたらぬも、お題に基づいて各自大森の町を探索する。

最終日の成果発表は日本工学院の教室を使った。恒例の一服は、大森名物の海苔大福と共にいただいた。味の好みは別れた。名物にうまいものなしか。



籤引いた題をどのように解釈し撮影におよんだか解説しつつ映像を見せる。お題を出した人は、自身の思惑をこえた解釈に感心し、投影される映像に感嘆をもらした。10のお題に対する解釈と映像が集まると必然に映像表現の可能性と不可能性が抽象される。日本とマレーシアの映像風俗の違い、ビデオ機器の目と人の目の差、技術習得の要不要など、多岐にわたる映像談義に両国の参加者が白熱した。ワークショップ最終日に相応しい熱のこもった話し合いのまま4日間の幕を閉じた。

閉幕後有志が集まり蒲田駅前で夕飯をともにする。ハラル・ベジな献立がない店にも関わらず、大里、山田、田中の3人が直談判。特別ハラル&ベジメニューを並べてもらう。連日のハードワークに、飲んべえのシャロンも生ビール2杯でウーロン茶に切り替えていたのが印象的だった。

この日はワークショップの最終日であったが、佐藤は翌日の東京展上映のために、機材を搬入。日本工学院から椅子を運び入れ、プロジェクターのチェックをしていると電源系統のトラブルが発生した。簡単には直らないと判断し、ビクターに連絡し、何とか代替え器を翌日に入れてもらうことになった。上映作品を持ってくるはずの田中は、DVD作成の途中でこれまたトラブルが発生。ストライプスペースが閉まる19:00までには持てこられないという。幾つかの機材も田中が搬入する予定だったが、急遽、マレーシアアーティスト達が宿泊している赤坂のワイクリーマンションに機材と上映作品を運び込んだ。

10月2日（金）

六本木ストライプスペースでの上映は今日が初日。佐藤は日大での授業の後、16:30から日大の学生に向けたレクチャーがあり、上映は田中、服部に任せていた。

授業中に服部から、プロジェクターに画がでないという連絡が入ったが、ビクターの人の助けで解決した。イベントの時は本当に予期せぬいろいろなことが起こる。

この日の日大のレクチャーは、ヌルハニムとシャロンであった。カマル、マヌール、シュウワイの3人は、この日の最後のプログラムで田中とライブイベントを行うことになっている

ので、その準備をしている。日大の学生は映像コースの3,4年生を中心に15名程度。小規模になったが、みな個人映像には興味がある学生だった。ヌルハニムはマレーシアのビデオアートについての概略を話し、続けて自身の作品「seRANGa」を上映した。この作品は9.11以降のイスラム社会に対するメディア暴力などを問題にしている。

シャロンはこれまでのワークショップの活動や、7月の札幌のプロジェクトについて写真を交えて説明した。



レクチャー終了後、シャロン、ヌルハニムと六本木に向かい、ストライプスペースに合流した。六本木では最後の上映プログラムが始まっていた。その後、ライブの準備のたまにインターバルをとり、ライブイベントが始まった。



初日終了後、近所の居酒屋で食事をした。ライブが終わっても、明日は作家それぞれが、持ち時間を使ってプレゼンテーションをするという「無礼講な30分×5」が予定されている。居酒屋で様子を見ながら、ひとりひとりを呼び出し、明日のプランについて打ち合わせを行った。



10月3日（土）

六本木ストライプスペースでは、午後から作品上が始まつた。この日、佐藤とシャロンは板熱でのレクチャーがあつた。作品上映の間に13:00～14:30のレクチャーだった。やはり客層が一般客だったので、内容に気を遣つたが、シャロンはしっかりとマレーシアの一般的な情報も準備してくれていた。13:00少し前にシャロンと通訳を引き受けてくれた日大の3年生・田中美帆が到着。おにぎりを食べながらの軽い打ち合わせの後レクチャーが始まつた。



レクチャー終了後、六本木に合流。この日は東京の最終日であった。前日に打ち合わせた「無礼講な 30 分×5」はそれぞれのアーティストの準備で手間取り、予定時間を大幅に超えての終了となってしまった。オーナーの塚原さんには迷惑を掛けてしまったが、最後は気持ちよく記念撮影に応じてくれた。マヌールは子どもの出産が間近で、福岡行きには参加せず、この日が最後となった。



10月4日（日）

この日は、マレーシアアーティスト達は休日となった。それそれが観光や買い物に出かけたようだ。板熱では作品上映が行われた。この日の観客もそれほど多くはなかったが、前日のレクチャーを聴いて、見逃したプログラムを見に来てくれた人がいたのは嬉しかった。

10月5日（月）

17：05 の羽田発福岡行きで佐藤と柳田が先発。17：25 分発で服部、田中、マレーシア作家4人が出発。19 時半頃、福岡空港で合流した。九州産業大学の立花寮に向かう。福岡展の協力者である九産大の黒岩俊哉先生と井上貢一先生が手配してくれた。一泊朝食込みで 2500 円程度の費用であった。JR の駅で降りて直ぐ脇の九産大構内にはいるが、立花寮はこの駅からはずいぶんと遠かった。構内の坂を上り始めると、大きな荷物を抱えたヌルハニムが「まだか？」と聞いてくる。「後半分くらいだ」と答えると、絶句していた。10 分以上は歩いた。

寮に着くと舍監の人が出迎えてくれたのだが、入寮の手続きと説明があるからこの部屋には入れという。門限は 10 時、11 時になると門は閉まると伝えられた。寮内では禁酒。われわれは空腹だったが仕方ない。諸注意を聞いて、寝具を各部屋に運び入れ、近所で食事が出来ないか探してみたが、21 時を回っていて、喫茶店も閉まり、近所にはカレー屋しかなかった。マレーシア人とカレー屋に入るわけにも行かず、セブンイレブンで食料を買い込んだ。服部と田中、佐藤は買い物の途中でカレーが食べたくなって、3 人でカレー屋にて食事。幸いビールもあつた。

10月6日（火）

寮の朝食は 8：30 までだった。学生達と同じメニューで、豚肉がダメなカマルとヌルハニム、ベジタリアンのシャロンにはちょっと厳しかったようだ。初日はみんな起きてきたが、翌日からはひとり、ふたりと朝食時に現れなくなった。食堂のおばさん達は親切で、おかずが無くならないようにと、われわれの分を取り分けてくれていた。次の日からは、今朝は 4 人ですなど

と人数を告げるようとした。

この日は福岡アジア美術館に向かい、同時期に開催されていた「福岡アジアトリエンナーレ」を観た。その後、佐藤と田中は一足先に大橋の九州大学サテライト・ルネットに向かった。そこで福岡開催の関係者でウエルカムパーティーを計画していた。田中と佐藤は早速途中で博多ラーメンを食した。豚肉がダメなマレーシア人と豚骨ラーメンは食べにいけないので早速抜け駆けした。

ルネットでは、2階のスペースで板熱で上映したドキュメンタリーの準備をして、1階ではパーティーの準備をした。この準備をしてくれたのは、NPO法人デザイン・都市プロジェクトの福田忠昭さんとそのスタッフだった。福岡在住の佐藤の兄・俊郎も駆けつけてくれた。福岡のアーティストとの交流を目論んでいたが、基本的には準備をしてくれたスタッフだった。九州大学の田上健一先生は柳田の大学時代の同級生であり、この施設の手配もしてくれた。彼が数人の学生を連れてきてくれた。4人のアーティストを紹介し、懇談することが出来た。

九産大の黒岩先生も駆けつけてくれて、ルネットが閉じた後は寮に帰る途中で、博多名物の屋台に入った。黒岩先生の行きつけの屋台で、焼き鳥などを食べていたが、そのうちシャロンがお好み焼きに興味を示し、肉抜きで焼いてもらったら、たいそうみんなが気に入っていた。門限の時間を過ぎたので、早速黒岩先生にお願いして寮に電話を入れてもらった。初日から門限破りだった。



10月7日（水）

この日は九産大でレクチャーが予定されていたが、16:30開始だったので、それまでは観光に行くことにした。市内は別の日にも行くことが出来るので、博多湾を挟んだ向かい側にある志賀島に行くことにした。地続きの半島で、九産大のある場所からはバスで行くことが出来る。志賀島は最古の金印が発見された場所で、邪馬台国九州説の有力な根拠にもなっている。ローカルな路線バスで終点まで向かい、海沿いの道をみんなで歩いた。九州の福岡にマレーシアの作家達ということの不思議さが、歩きながらあらためて感じられた。風は強かったが、心地よかった。昼食を魚料理の店で、焼き魚や魚介の釜飯などそれが楽しんだ。シャロンは茶碗蒸しを食べていたと思う。帰りは志賀島と博多湾を結ぶ船に乗り、途中の停泊所まで短い船旅も楽しんだ。



九産大のレクチャーには30数名の学生が参加してくれた。黒岩先生、井上先生と国際交流課

の部長さんも来ていた。佐藤が今回のプロジェクトの概要を説明し、次にヌルハニムがマレーシアのビデオアート事情を説明した。その後、順にそれぞれの制作姿勢や作品について話しをした。学生の中にマレーシアからの留学生がいて、レクチャー終了後に彼らとしばし語り合っていた。この日は、九産大の近所での居酒屋で食事をし、カラオケに行きたいとうるさいカマルのリクエストに応えた。宗教的には一番厳格そうなヌルハニムがハードロックを歌っていたのが印象的であった。この日もずいぶんと焼酎が進んだ。もちろん、カマルとヌルハニムは飲んでいない。



10月8日（木）

福岡アジア美術館あじびホールでの上映初日であった。事前の告知なども十分ではなかったため、集客には期待出来なかった。立花寮を出てあじびホールまで行き、基本的には SVP2 のメンバーで受付や上映を行ったので、マレーシアの作家は夕方のティーチインまではフリータイムにした。10人程度の観客で始まったが、上映の環境はよかつたし、何よりもこの場所で上映出来たことがうれしかった。



この日は、上映終了後に、みんなで黒岩先生の個展が開催されていた会場へ向かった。トリエンナーレに参加しているホイチョンも一緒だった。途中で若いアーティスト達が共同運営しているというギャラリースペースに立ち寄った。もともと遊郭があった建物を使い、アトリエとギャラリースペースを運営していた。

黒岩先生の個展会場は、バーとギャラリースペースが隣接する不思議な会場で、到着すると黒岩先生が会場の設置の手直しをしていた。バーの方でビールを飲み、その後は皆で魚を食べに行った。以下の活き造りにシャロンが卒倒しそうだったが、ヌルハニムは無理矢理食べさせようとしていた。面白い人達だ。

10月9日（金）

アジ美ホールでの上映 2 日目。観客数は伸びなかつたが、トリエンナーレのガイドをしているスタッフの女性達が誘い合って見に来てくれた。マレーシア作家達はこの日も基本的にフリーにして、夕方のティーチインで待ち合わせた。この日は九産大を出る時点で、シュウワイだけがわれわれと一緒に美術館まで行き、シャロンとヌルハニムは大学周辺のディスカウントショッピングなどを見て回ったらしい。カマルは、初日以外は朝食に現れず、帰りにいつも食パンを一斤買って帰っていたので、それを食べていたのだろうと思う。彼も、大学周辺を散歩したようだ。口には出さなかったがみんな疲れていたんだと思う。

この日はシャロン以外の三人には最後の夜だった。田中は温泉に行きたいといっていたし、長浜の屋台も見せたかった。都合よく、長浜の傍に温泉施設があって、その隣は「ざうお」という大きなけすのあるお店だった。シュウワイと柳田、田中、カマルは温泉に行き、残った服部、佐藤、ヌルハニム、シャロンで「ざうお」に入った。「ざうお」では釣り竿を借りて魚を釣り直ぐに調理してくれるサービスがあった。簡単には釣れないだろうと思っていたが、ヌルハニムと服部が鯛を釣り上げてしまった。ひとつを刺身で、ひとつを焼き魚で頂いた。遅れてきた風呂上がりのカマルも釣りたそうだったが、食べきれないから勘弁してもらった。カマルの温泉体験も楽しかったようだ。一緒に入った田中によると、ブラブラさせるのはさすがに抵抗があったようで、完璧にガードしていたという。いずれにしても楽しい夜だった。店を出て、長浜の屋台街を散歩し、博多の漁港までいって海を観ていた。この海がマレーシアまで繋がっているなどという思いが、恥ずかしくなくこみ上げてきた。この日も門限までには帰れなかった。



10月10日（土）

カマル、ヌルハニム、シュウワイの3人がこの日福岡を発って、東京に帰った。成田の近くで一泊し、翌日の午前にはマレーシアに向かう。空港までみんなで行き、ランチを食べて、見送った。慌ただしい毎日だったが楽しかった。残ったシャロンは、この日のプログラムに参加した。この日は当初、アジア美術館の主催で「ホイチョン・プログラム」を組むことになっていたが、細部の打ち合わせはギリギリまでできなかつたようだ。われわれは、前日にホイチョンと会って、前半と後半で分けようというアウトラインを話していたので、準備はできていた。ホイチョンのレクチャーには、美術館の関係者が参加していて、30人くらいは来ていた。ホイチョンの作品をめぐる話は興味深かった。彼は社会的な弱者やそうなってしまった人に興味があるようだ。戦争も大きな意味では弱者を作り出すシステムだと言つていい。彼の新作「DOG HOLL」は、父親の戦争体験をベースにした作品で、自らが20年前に制作したドキュメンタリーをドラマとしてリメイクするという意欲的な作品だった。

ホイチョンの時間が終了すると、SVP プログラムだった。休憩を挟んだのでみんな帰ってしまうんだろうなと思っていたら、20人くらいが戻ってきてくれた。佐藤、田中、服部がそれぞれ自己の作品を上映し、制作の姿勢や問題意識について話した。これは当初の企画にはなかったのだが、最後にわれわれの作品も上映しようということになり実行した。福岡上映は終わった。



この日は、ホイチョン、シャロン、服部、佐藤、柳田、福田さん、福田さんの奥さん、黒岩さんでもつ鍋のお店に行った。田中のたっての願いだった。そしてこのお店は美味だった。豚肉がダメな人とはいいけないのだが、シャロンも、ホイチョンもイスラム教徒ではないので大丈夫だった。やっぱり博多のもつ鍋はうまいなーと感心した。

10月11日（日）

この日は田中廣太郎が一足先に東京に戻ることになっていた。事前に「終わったら温泉に行くよ」と伝えてあったのだが、東京でイベントがあるらしい。13：50分福岡発だったので、温泉に行くためのレンタカーを先に借り、福岡空港までみんなで向かった。田中の顔には明らかに温泉に行きたかったという、半ば嫉妬に似た感情が見て取れた。

こうして、シャロン、服部、柳田、佐藤の4人は最後の温泉に向かった、杖立温泉は古い温泉町で、最近では黒川温泉などの方が人気が高いが、ひなびた風情が気に入っていたので、杖立にした。川縁にへばりつくように建つ温泉街は、変わらない環境を保っていた。シャロンはずいぶんと気に入ってくれたようだった。



翌日は車でゆっくりと日田をめぐり、福岡に戻った。その夜、佐藤の母親と親戚が皆を食事に誘ってくれた。シャロンを生バンドでロックを歌わせてくれる店に連れて行き、この日は博多駅付近で一泊した。

翌日、シャロンはマレーシアに帰国し、佐藤、服部、柳田は東京に戻った。振り返れば約一ヶ月、このイベントで動いていた。単にイベントの主催者であるというだけでなく、アーティスト達と共に作り上げたイベントだった。次は、マレーシアでいろんな体験ができるることを楽しみ待っている。